

# 明代の「象声詞」

野口宗親

## On Onomatopoeia in the Ming Period

Munechika NOGUCHI

(Received September 1, 1997)

### 1. はじめに

先に拙稿「清代北京語の『象声詞』」(1993)において、『紅樓夢』と『兒女英雄伝』を資料として、清代北京語の「象声詞」(日本語でいう擬音語、「擬声詞」ともいう)を考察した。その結果として、『紅樓夢』の象声詞が文語や元・明以来の象声詞を使用することが多く、型や用法も固定的であるのに対し、『兒女英雄伝』の象声詞は多様で、用法もかなり自由で、現代語の象声詞に近くなっていることを指摘した。そこで本稿では、明代の象声詞を調査し概観し、さらに先行する元の時代の象声詞と、後の清の時代の象声詞を比較することにより、中国語象声詞の、特にその形式(型)について、歴史的発展過程を明らかにしたい。元代の象声詞については、すでに田中謙二(1992)、趙金銘(1981)、劉鈞傑(1985)らの考察があるので、これらを参考にして比較をする。

明代の言語資料として、『水滸伝』(元末明初, 14世紀成立), 『西遊記』(16世紀中頃成立), 『金瓶梅』(16世紀末成立)の三大白話長編小説を使用した。三書は成立時期や作者の出身地も違いがあり、当然象声詞も同じではない。明代の象声詞全体を考察するとともに、三書間の違いについても考察してみたい。引用文( )内の水は『水滸伝』, 西は『西遊記』, 金は『金瓶梅』の略, テキストは論文の末尾に掲げるものを使用し, 回と頁数を示した。象声詞にはアンダーラインを施した。

### 2. 象声詞の型

『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』に見える象声詞の型は、語形の各音節を ABCD で示すと、次のようなものがある。

- |            |            |
|------------|------------|
| (1) A 型    | (2) AA 型   |
| (3) AB 型   | (4) ABB 型  |
| (5) AABB 型 | (6) ABAB 型 |
| (7) ABCD 型 | (8) ABAC 型 |
| (9) ABBC 型 | (10) ABC 型 |

使用されている象声詞の種類・数としては、(1)～(5)のA型からAABB型までがほとんどを占める。(6)～(10)の型はあることはあるが、いずれも数例程度で、きわめて少ない。(6)のABAB型は『水滸伝』『金瓶梅』に見えない、(7)のABCD型は『水滸伝』に見えない、(8)のABAB型は『金瓶梅』に見えない、(9)のABBC型は『金瓶梅』だけに用いられるが、これは元曲の鄭徳輝「倩女離魂」の中の「水仙子」という曲の引用である。また、(10)のABC型は同じく『金瓶梅』だけに用いられるが、「後庭花」という曲中にある。

元曲でよく見られた(7)～(10)の型は三書ではきわめて使用例が少ない。明代長編小説の象声詞の型は意外に簡単である。これは先に拙稿で指摘した『紅樓夢』の象声詞の型がA型、AA型、AB型、AABB型でその大半を占める傾向と近いようである。AAB型、ABCB型などは採取できなかった。

次に、それぞれの型について三書に見られる象声詞を示したうえで、その用法などの特徴について、元代・清代と比較しながら、具体的に検討を加えていきたい。象声詞は拼音順に並べた。

## 2.1 A型

水滸伝 憧、噓・璫・鎗、攀、忽、撲、颯、騰、呀、錚 9種  
西遊記 噓、咽、忽・呼、滑、乒、撲、沙、刷、搜、鳴、嚶 11種  
金瓶梅 噓、忽、撲、颯、呀、呱、劃 8種

(『紅樓夢』は14種、『兒女英雄伝』は16種)<sup>1)</sup>

A型は種類が少ない。三書又は二書に共通するものが多い。『紅樓夢』にも、「噓、忽、颯、呀、刷」が見える。少ない理由は、単音節なので外界音に適した音節が限られるためであろう。

機能として、A型の象声詞は「的」或いは「地」をともなって状語(連体修飾語)として用いられることが多い<sup>2)</sup>。

① 正在樓上自言自語，只聽得樓下呀地門響。(二階でひとりごとをつぶやいていると、階下でギーと戸のあく音がした。水21・315)

② 那怪物不敢相迎，搜的又鑽入河内。(その妖怪はたちうちできなくて、サッとまた川の中にもぐりこみました。西22・287)

③ 這官哥兒呱的聲怪哭起來。(官哥はギャーと泣き出しました。金53・339)

③は「呱的(一)声」の省略形である。ちなみに『金瓶梅』で省略形はここしか見えない。「呱」はほかに第30回と第59回にも用いられているが、いずれも「呱的一声」となっている。『金瓶梅』第53回と第54回は後人の手で補われた可能性がある<sup>3)</sup>とされるので、著者の違いを示す証拠の一つになるかもしれない。象声詞のA型は「A的一声」のようにあとに数量詞をともなって状語として用いられることが多い。

④ 好大聖(蒼蠅兒)，嚶的一聲，飛在那前面走的女子雲髻上釘住。(悟空〔が化けた蠅〕はブーンと飛んで、先頭に行く女の髻〔まげ〕にとまりました。西72・972)

⑤ 良久，只聽房裏呱的一聲，養下來了。(しばらくすると、部屋でオギャーという声が出て、赤ん坊が生まれ落ちました。金30・248)

また、「憧的一箭(水41)」「颯的一拳(金19)」「呼的一翅(西72)」など動量詞をともなう例も見られるが、極めて少ない。

ところで、A型の象声詞につく構造助詞「的」と「地」であるが、これについて香坂順一(1987)は次のように述べる。

「一音節+“地”」は、現代中国語にも“忽地”“特地”“暗地”“悄地”“驀地”などが見られるが、これら“地”は一般的に構造助詞が轻声であるにもかかわらず（中略）非轻声である。このことだけで、当時轻声でなかったと断言できないが、“的”との混用を見せながらも、“地”を保って来たところから、また「古語は往往にして古い音をそのまま継承する」というところからも、非轻声であったと、一応考えてよいようである。

“~地”は唐・宋時代の資料に既に見える。『水滸伝』では、「地」と「的」は混用されるが、「地」の方が多用される。「撲地」「騰地」「驀地」「忽地」「托地」「霍地」のような動作や変化の突然である様子を示す語のほかに、

⑥ 颯地掣出把尖刀來。（サッと短刀を抜いた。水 26・410）

⑦ 只聽得鎗地一聲響，却射上背後護心鏡上。（カチンと音がして、矢は背中の護心鏡〔胸の前後のあてがね。護鏡ともいう〕に当たった。水 64・1091）

のような象声詞に用いられる。注目されるのは⑦の「鎗地一聲響」のように「一声」のあとに「響」が用いられることが多いことである。「~地（的）一声」がまだ安定した表現でなかったことがわかる。『金瓶梅』の第1回から第6回までは、『水滸伝』第23回から第27回前半までの話や文章を踏まえているが、武松が景陽岡で虎にでくわす場面は両書で次のようになっている。

⑧ 只聽得亂樹背後撲地一聲響，跳出一隻吊睛白額大虫來。（水 23・346）

⑨ 只聽得亂樹皆落黃葉，刷刷的響，撲地一聲，跳出一隻吊睛白額斑斕猛虎來。（金 1・9）

『金瓶梅』では「響」をとって、わざわざ前に「刷刷（木の葉や枝が軽く触れ合う音）」を加え、そちらに「響」をつけ、「撲地一声（パッと）」を状語として、下文に続けている。『金瓶梅』『西遊記』では一部を除いて基本的に「的」が用いられるが、『金瓶梅』の⑨で「地」が用いられているのは、この部分が『水滸伝』をおそったためだと思われる<sup>4)</sup>。

A型の象声詞は古代では大変少なく、文中における安定感を増し、かつ副詞化させるため、「~然」などと接尾辞をつけることが多かった。『水滸伝』では「霍然」「撲然」「驀然」「鏗然」「錚然」などが見える。

⑩ 打在鎗甲護鏡上，錚然有聲，伏鞍而走。（〔つぶては〕鎗甲護鏡にあたって、カチッと音、鞍に身を伏せて逃げました。水 70・1183）

これらの「~然」はいずれも「~地」に置き換えられる。『水滸伝』におくられて成立した『西遊記』『金瓶梅』では「~然」はきわめて少ない。A型の象声詞が、

「A然」→「A地（的）」→「A地（的）一声」

と文語からより口語性の濃い表現へと変化していく過程がうかがわれる。そういう多様性が伺われる資料が『水滸伝』である。『西遊記』や『金瓶梅』のA型象声詞の用法は『紅樓夢』に近い。

「~地（的）一声」がいつごろ成立したか、よくわからないが、元曲を調べてみると、次のような例が若干見られる。

① 我拈弓在手，搭箭當弦，唵的一聲射去，正中大虫。（私は弓を手に取り、矢をつがえてヒョウと放てば、見事に虎に命中しました。「合汗衫」第三折）

② 只一拳，瑤的一聲把他那鞭打在地下。（ただ一撃で、バタッと彼の鞭を打ち落としました。「單鞭奪槩」第二折）

## 2.2 AA型

- 水滸伝 嗷嗷，潺潺，噹噹，瑟瑟，各各，滾滾，哈哈，呵呵，齣齣・齣齣，唧唧，朗朗，瀝瀝，烘烘，喃喃，恰恰，鏘鏘，颯颯，颯颯，簌簌，哇哇，嗚嗚，嘻嘻，吸吸，浙浙，呀呀，噉噉，錚錚，吱吱 28種
- 西遊記 潺潺，淙淙，答答，噹噹，滴滴，叮叮，瑟瑟，滾滾，咽咽，哈哈，齣齣，呵呵・嚇嚇，哼哼，烘烘，哄哄，轟轟，齣齣，呼呼，朗朗，嚙嚙，嘹嘹，玲玲，颯颯，沙沙，瀟瀟，刷刷，颯颯，脫脫，哇哇，汪汪，颯颯，嗚嗚，嘻嘻・吸吸・歛歛，浙浙，啞啞，嚶嚶，呦呦，啞啞，丁丁 39種
- 金瓶梅 潺潺，嗒嗒，呱呱，滾滾，哈哈，嗚嗚，呵呵，齣齣，嘩嘩，唧唧，磕磕，嚙嚙，呷呷，隆隆，嘍嘍，喃喃，恰恰，颯颯，刷刷，颯颯，簌簌，哇哇，嗚嗚，嘻嘻，浙浙，蕭蕭，呷呷，喁喁，噉噉，嘖嘖，啞啞 31種

(『紅樓夢』は16種、『兒女英雄伝』は24種)

このような重疊型(疊語)は形容詞、動詞、名詞、副詞、数詞、量詞にもみられる一般的な構語法である。古代の象声詞は疊語が主流であって、耿二嶺(1986)によると、『詩経』の中で用いられる疊語の象声詞は60近くにのぼるといふ。したがって、疊語の象声詞には古い歴史を持つものが多い。しかもこの疊語の象声詞はしばしば次のような四字句の常套語を形成し、作品中に挿入される詩詞及び場面や背景を解説する箇所にも用いられる。

唧唧乱蛩(水8・129)、金風浙浙(水30・461)、朗朗誦経(水53・884)、陰風颯颯(水65・1105、西11・118)、鏘鏘環珮(水82・1347)、呵呵大笑(水5・83)、伐木丁丁(西1・10)、潺潺流水(西17・226)、塵埃滾滾(西53・711)、車馬轟轟(西91・1223)、鶯聲嚙嚙(金37・235)、修篁簌簌(金54・383)、喁喁呖語(金55・415)、鑼鼓瑟瑟(金65・160)

例えば、

- ③ 詩曰：北京留守多雄偉，四面高城崛然起。西風颯颯駿馬鳴，此日冤囚當受死。(詩に曰く：北京の留守居は雄偉多く、四面の高城崛然として起つ。西風颯颯〔さつさつ〕として駿馬鳴けば、この日冤囚まさに死を受くるべし。水63・1069)
- ④ 好雨：漠漠濃雲，濛濛黑霧。雷車轟轟，閃電灼灼。滾滾狂風，淙淙驟雨。(その雨たるや：漠漠たる濃い霧，濛濛たる黒い霧。雷車はゴロゴロ，稲光はびかびか。ごうごうと狂風，ざあざあと驟雨。西87・1180)
- ⑤ 但見：翠柏森森，修篁簌簌。芳草平鋪青錦褥，垂柳細舞綠絲條。(見れば：翠の柏はうっそう，篠竹はざわざわ。芳草は平らに，青い錦の褥〔しとね〕。垂柳はなよなよ，緑の組みひも。金54・383)<sup>5)</sup>

のようである。これらは白話長編小説の中の文語或いは文語的な部分で、当時描写力がいまひとつであった白話の部分の補い、かつ俗文学に典雅な雰囲気を感じ込ませるために、重要な役割を果たしている。古いAA型の象声詞は実際の音と離れて音の象徴性が薄くなったものが多いが、このような場面で、視覚的な聴覚的なイメージ(落ち着いて上品)を喚起させるためにしばしば用いられている。後の人には繁雑で邪魔な部分であるが、

一方で、元の時代に多用されたABB型の象声詞は俗的な印象をもち、作品に緊迫感を与え、リアルなイメージを喚起させる働きを持っているようである。

量的な面で明代三書のAA型と清代の『紅樓夢』『兒女英雄伝』のそれとを比較してみると、三書の多さが目立つ。これはもちろん作者の好みもあろうが（『紅樓夢』の作者曹雪芹は、視覚的描写の方に長けていたようである）、それより明代の白話長編小説に上記のような文語的要素（詩詞とか場面描写）が色濃いせいもあろう。三書のうちでも文語的要素に富む『西遊記』にAA型が特に多いのも（『紅樓夢』の倍以上）、うなずける。

AA型の象声詞は大きく二つに分けられる。一つは「潺潺(chánchán)、瀝瀝(lìlì)、喃喃(nánnán)、玲玲(línglíng)、颯颯(sàsà)」の類で、定型のAA型象声詞と呼ばれる。これは単音節(A)に分離できないで、二音節重ねてはじめて意味をなす単純詞である。これらの語は古い歴史をもち、現代でもしばしば書面語（書き言葉）に用いられる。現代では一般の象声詞がおおむね第一声で発音されるのに対し、定型のAA型象声詞は、例に示すようにそれぞれ固有の声調で発音されるのが特色である。

もう一つは「噹噹、鏗鏗、颯颯、嚶嚶、沙沙」の類で、単音節(A)を重ねて、連続した音を描写したものである。定型のAA型がどちらかという概念語化されてしまっているのに対し、具体的な音の象徴性が高い。

人や動物の声（哈哈、呵呵、喃喃、朗朗、齣齣、嘻嘻、喞喞、嗶嗶、唧唧、嚶嚶、恰恰、噦噦、喳喳）は一般に重ねて用いられるが、これらは『金瓶梅』に多いのが目立つ、『紅樓夢』や『兒女英雄伝』も同様である。人物の会話や行動描写に特長があるためではないだろうか。

A型やAA型は時に更に音節を重ね、3音節(AAA型)又は4音節以上にして用いる場合がある。『紅樓夢』の韻文に2種、『兒女英雄伝』に11種みられた。このような中国語の語構成からはみだす象声詞の使用は中国語の多音節化の流れと関わると思われる。明代の三書には『西遊記』の「呵呵呵，你這和尚滿口股柴」（ハッハッハッ，この和尚め，でたらめばかりいいおって。西78・1058）のような例があるだけで、きわめてまれである。

### 2.3 AB型

水滸伝	潺湲，叮噹，脰察・梘察・喞察・脰查，脰脰，咕咕，嘹唳，撲鏗，撲桶・撲槌・撲同，撲箴，嗚咽，啞啞 11種
西遊記	阿嚏，潺湲，叮噹，挖掬・挖喳，挖咋，挖撲，骨（骨）都，鞞鞭，咽啞，忽喇・忽喇・忽辣，忽哨，哼噴，劃刺・滑辣，唧噥，睨睨，呢喃，嘖叨，刷刺，撲搭，蹠蹠，撲魯・撲祿，乒乒，辟剝，潑刺，撲通，浙瀝，啞啞 27種
金瓶梅	叮噹・玎噹，叮咚，砧碌，滑浪，啾唧，磕磕，玲瓏，呢喃，撲吃，撲挖，啞嚶，忒楞 12種

（『紅樓夢』は16種，『兒女英雄伝』は28種）

この型は先秦以前はあまり多くはないが、漢代以降、漢語の複音節化の趨勢に伴い大量に生まれた。異なる二つの音節によって作られ、やや複雑な一つの音を表す(単純語)。しかし異なる二つの音節の結び付きとはいっても、全くでたらめに結び合わされている訳ではなく、ある程度の規則性や音楽性がある。象声詞が単なる声帯模写でなく、それぞれの言語の中で、その体系に合わせて慣習化されたものだからである。中国語の場合、AB型の象声詞の音声的特徴は、疊韻と双声のものが多い点である。例を挙げてみる。

疊韻：潺湲，骨都，鞞鞭，砧碌，咽啞，嘖叨，撲魯，撲箴，浙瀝

双声：叮噹，叮咚，睨睨，啾啾，嘹唳，玲瓏，呢喃，乒乓，咿啞，咿嚶

本来、複音節化する場合、音声の結びつきは自由のはずだが、象声詞にこのような疊韻や双声が多いのは、中国人の音に対する嗜好性(美的感覚)が自然に現れたものであろう。AB型の象声詞の種類を見てみると、『西遊記』がほかの二書にくらべて特に多いのが目立つ。

機能の面からいうと、AB型の象声詞は、A型と同じく構造助詞「的(地)」をともなって状語として用いられる。

⑩ 兩箇好漢，撲桶地都翻筋斗撞下江裏去。(二人の好漢はもんどりうって、ドブンと川の中に落ち込んだ。水 38・607)

⑪ (那潘金蓮) 忍不住撲吃的笑了。(〔潘金蓮は〕こらえきれずクスッと笑った。金 40・527)  
また、A型と同様、一回の音を表すので、「AB一声」と数量詞と結び付いて、状語として用いられる。現代語では四音のリズムにするため、「AB」と「一声」の間に「的」を入れないのが普通であるが、三書では必ずしもそうでなく、「AB一声」の方がまれで、「的」を入れることが多い。

⑫ 那怪果往下一口，挖啞的一聲，把個門牙都迸碎了。(その妖怪は果たしてがぶりとやりましたが、ガリッと音がして前歯が全部こなごなになってしまいました。西 76・1023)

⑬ 只聽得滑浪一聲，把金蓮擦下來(ドサンと金蓮は滑り落ちてしまいました。金 25・98)  
しかも、「AB(的)一声」は一般的でない。『水滸伝』には次の例しか見えなかった。

⑭ 聽得撲同的一聲響，可憐這婦人正被直丟在大酒缸裏。(ドボンと音がして、可哀そうに女は大きな酒甕の中に投げ込まれてしまいました。水 29・454)

動量詞との結び付きは「忽喇一下(西 50)」「脰查一刀(水 26)」などが見えるが、要するにAB型象声詞の用法は安定していない。

AB型象声詞のアクセントはBにあるが、動詞として用いられると、Bは轻声となる。AB型が動詞化する例は三書では、

⑮ 口裏嘮叨，只管許願。(口の中でくどくど言いながら、ひたすら願かけをします。西 32・427)

のように人の声を表す、ごく一部に限られ、清代の『紅樓夢』や『兒女英雄伝』のように動詞化した象声詞のあとに「了，着，下去」などはつかない。

## 2. 4 ABB型

水滸伝 剝剝剝，勃喇喇・勃刺刺，滴溜溜，脰脰脰，骨碌碌・骨碌碌，刮刺刺，忽喇喇・忽喇喇，撲刺刺・撲喇喇，峯嶺嶺 9種

西遊記 撥喇喇，滴流流・滴溜溜，吃迸迸，跣蹬蹬，齧支支，骨都都，鞞轆轆，忽喇喇，鞠律律・掬嘩嘩，拍刺刺，撲刺刺・撲喇喇，撲轆轆，撲梭梭，突魯魯，浙瀝瀝 15種

金瓶梅 嘍嘍嘍，滴溜溜，格支支，骨都都，骨碌碌・砧碌碌，忽刺刺，啣嘍嘍，踈刺刺，撲簌簌，撲簌簌，厮琅琅，忒楞楞，刷刺刺，絮叨叨，支楞楞，卒律律 16種  
(『紅樓夢』は10種，『兒女英雄伝』は17種)

田中謙二(1992)は次のように述べる。

中国語の俗語といえ、三音節語が本命だと、わたしは考える。それを発音する際、第二・第三音節のいずれかに軽聲化や短促化が行なわれ、一種の活發感を放散するし、一種の安定

感もそれに賦與する。元曲の歌詞が南曲と異なり、三音節をユニットとすることは、まさに俗語の特徴を活用したものだといえよう。

ABB型の象声詞は、最も早くは敦煌変文あたりから見え始め、元の雜劇になると大量に使用され、その文学を特徴づける働きをしている。というのは、早くからあったA型、AA型、AB型、AABB型に対し、純粹に口語から生まれた象声詞として一種の生々しさ躍動感を伴って使用されたと考えられる。とくに歌詞のリズムにかかわっている。

ABB型の象声詞の特徴はどこにあるのだろうか。ABB型の象声詞は連続して鳴り響く音で、第一音節のAが短い音で、BBには頭子音に流音と呼ばれる1音がくるものが多い。これはなぜだろうか。三書に使用されたABB型象声詞の第一音節の字を見てみよう。

剌, 嘍, 滴, 肱, 火, 骨, 刮, 忽, 撲, 格, 活, 啣, 踈, 厮, 忒, 刷, 絮, 支, 卒, 突, 撥, 屹, 屹, 齧, 轂, 鞠, 拍, 浙

興味深いことに、「厮, 忒, 絮, 支」(『金瓶梅』)以外はすべて入声(語尾に-p, -t, -kがくる)の字である。このように第一音につまった音の入声が用いられるのは、ABB型の象声詞成立の由来とかかわっているのではないだろうか。第一音で緊迫感(短い)を与え、第二・三音に滑らかな流音l(喇, 溜, 流, 琅, 碌, 律, 輓, 瞭, 魯, 瀝)や余韻をもつ-ng音(釐, 琅, 嚙, 楞, 迸)をもってきて、三音節の長さ(間延び)をカバーしている。三音節で二音節分くらいの長さの感じであろうか。田中氏がいわれるようにこれが一種の生々しさ躍動感をともなう理由である。元の時代、北方では入声は消滅したが、そのはぎれの良さは受け継がれ元曲で盛んに使用された。明代では種類と使用頻度は少ないが元曲の歌詞に当たる部分や場面背景描写の部分に用いられ、生々しさ躍動感を与えている。

- ② 忽聽得刮刺刺地響一聲, (李逵)却從薊州府廳屋上骨碌碌滾將下來。(突然ガラガラッという音がして, (李逵は)薊州府の役所の屋根からゴロゴロころげ落ちてきました。水53・886)
- ③ 登的洞門唳喇響。草裏飛禽撲轆轆起, 林中走獸掬嚙行。猛然一陣狼蟲過, 赫得人心跣躑躑驚。(登れば, 洞門がガラガラッと鳴り響きます。草の中の鳥がバタバタッと飛び立ち, 林の中の獣がうろうろ駆け回ると, いきなり虎狼が現れて, 心臓がドキンドキンといたします。西20・259)

古代の象声詞は意味がよくわからないものが多い。辞書にもないか、「～の音」などとして、詳しい説明がない。③の「掬嚙」はよくわからない。ただ発音は少し異なるが、元曲や『水滸伝』『西遊記』に「卒律律・足律律」などが見える。元曲・寶娥冤・第四折の「足律律旋風中來」につけられた『元曲選校注』の注を見てみると、「ここでは鬼魂が北風の中を急ぎ走る音。また卒律律, 足律律, 促律律に作り, いずれも急速に旋回する様子」とある<sup>9)</sup>。少し発音が違うが、現代語の「味溜溜」などと近いのではないか。後考を俟つ。

ABB型の象声詞は明代や清の『紅樓夢』あたりでは減少するが、『兒女英雄伝』あたりになり、中国語の口語化、複音節化が進むと、「鐺(dang) 啣啣」とか「鏘(qiang) 啣啣」といった第一音節Aに長い音節のもの(-ng)も現れて、多様化・増加していく。

## 2.5 AABB型

水滸伝<sup>7)</sup> 物音 : 必(剌)必剌剌, 叮叮噹噹, 刮刮雜雜, 啣啣啣啣

- 人の声 : 刮刮噪噪, 唧唧嘍嘍, 喃喃咄咄, 喃喃呐(訥)呐, 嗚嗚咽咽, 嘻嘻哈哈, 絮絮聒聒 11種
- 西遊記 物音 : 潑潑刺刺, 潺潺浹浹, 滌滌托托, 叮(汀)叮噹噹, 丁丁東東, 呼呼淅淅, 噴噴哇哇, 瞭瞭歷歷, 辟辟剝剝, 乒乒乒乒, 撲撲鎚鎚, 淅淅瀟瀟, 習習瀟瀟, 咿咿啞啞
- 人の声 : 嗒嗒嗤嗤, 咽咽嘍嘍, 哼哼噴噴, 唧唧嘍嘍, 嘻嘻(唏)嘻嘻哈哈, 絮(緒)絮叨叨, 勞勞叨叨, 嚙嚙嘈嘈 22種
- 金瓶梅<sup>7)</sup> 物音 : 叮叮噹噹, 刮刮雜雜, 咕咕咕咕, 啾啾唧唧, 撲撲簌簌
- 人の声 : 哼哼唧唧, 嘮嘮叨叨, 啐啐唔唔, 喃喃呐呐, 喃嘍嘍嘍, 嘻嘻哈哈, 絮絮答答, 絮絮叨叨 13種
- (『紅樓夢』は19種, 『兒女英雄伝』は6種)

AABB型の象声詞はAB型の繰り返し形式と考えられるが、AとBの二つの音が重なってかもしだす意味の強調や様子の描写に重点が置かれている。形容詞の状態描写形式に似る。AA型をただ二つ並べただけの(結合がゆるい)ものもあり、語の認定が難しいが、耿二嶺(1986)によれば、この型は漢代頃に現れ、隋唐頃に一般に用いられ始めたという。元曲ではAA型、ABB型に比べると多くない。三書を見ると、このAABB型は人の声(笑い声、泣き声、ぶつぶつ独りごとを言う声、うんうんうなる声など)を形容するものが多い。『水滸伝』『金瓶梅』では少なく、『西遊記』では少し増えるが、これはAAとBBの結び付きが弱く、本来独立して用いられるものを作者が表現を高めるために、恣意的に合わせて用いたものが多いためである。上の表では下線を施しておいた。例えば、

- ㉔ 又有些該班坐夜的, 滌滌托托, 梆鈴齊響。(また当直係が、カンカンカチカチと鈴と拍子木を鳴らしました。西52・695)
- ㉕ 呼呼淅淅, 陰風又起而退。(ヒューヒュー, ピューピューと陰風がまた吹いて、帰っていききました。西79・1071)

の例で、「滌滌」は鈴の音、「托托」は梆子(拍子木)の音、「呼呼」「淅淅」はいずれも風の音であるが、両者は慣用的に合わせて使われているもの(合成単語)ではなく、作者が恣意的に合体させて使ったものであろう。両者は「滌托」「呼淅」というように、AB型とすることができない。『西遊記』には象声詞にかかわらずこのようなAABB型が多く見える。二種の音を合成してAABB型の語を作り出すことは、現代の小説などにも、しばしば見られる。

物音を表すAABB型の象声詞は元曲や明の白話小説では大変限定的で、きまったものが多い。そして清代になっても、『紅樓夢』では「叮叮噹噹, 淅淅瀝瀝, 淅淅颯颯」の3語、『兒女英雄伝』にいたっては1語もみえない。『紅樓夢』にはAABB型が多いが、大部分は「嗚嗚咽咽, 咕咕唧唧」など人の声の形容である。多くのAB型の象声詞が比較的自由にAABB型に展開でき、聴覚映像効果を高める(鈴木和子1988)ために使用されるようになったのは比較的新しい<sup>8)</sup>。

## 2.6 ABAB型

- 水滸伝: なし 西遊記: 啞啞啞啞, 穀轆穀轆 金瓶梅: なし  
(『紅樓夢』は3種, 『兒女英雄伝』は11種)

ABAB型の象声詞はAB型の繰り返し形式であり、2回または連続した音を描写し、現代中国語

ではごく普通の象声詞である。AB型のほとんどはABAB型に展開できる。ところが象声詞の歴史を見てみると、この型がよく使われるようになったのは清代後半以降である。『紅樓夢』にはABAB型の象声詞はわずか「咯噹咯噹，咯咚咯咚，嘩喇嘩喇」の3種しか使用されていない(のべ4回)。『兒女英雄伝』になって少し増えた(11種)。元曲には「支楞支楞(金属の音)，磕撲磕僕(心拍音)」などごくわずかししか見えない(田中謙二 1992)。これはAABB型はともかく、ABを二つ重ねてABABという4音節になると、一単語としての音のつながりに無理(間延びする)があり、まだ口語化・複音節化が十分に進まないうちには、書き言葉で常時用いるのは抵抗があったのではないかと思われる。したがって、ABAB型の象声詞には口語的、俗的なイメージが強い。明代の三小説にはABAB型の象声詞は、わずかに『西遊記』に次のような例が見られるだけであった。

㊸ 他就瞞着我們，纔自在這隔壁房裏，一家一箇，啞啞啞啞的吃了出去。(やつらはわしらを欺き、この隣の部屋でくつろいで、一人が一つ、ムシャムシャ食ってたんだ。西 24・315)

㊹ 他兩個腹中絞痛，只聽鞞鞞鞞鞞三五陣陽鳴。(二人は腹がさしこんできて、続けざまに腹がゴロゴロと鳴りました。西 53・717)

㊸は八戒の会話、㊹は子母河の水を飲んだ三蔵と八戒が落胎泉の水を飲む所で、いずれもくだけた場面である。明の馮夢竜の『古今小説』では猫の泣き声の描写に用いている。

㊺ 只聽得兩個貓兒，セ凹セ凹地厮咬了叫，…(二匹の猫がニャーニャーかみあって…。古今小説 36・533)

## 2.7 ABCD型

水滸伝：なし 西遊記：劈哩撲辣，稀漓呼喇 金瓶梅：礮(秘)哩(里)礮(剝)刺  
(『紅樓夢』は1種、『兒女英雄伝』は4種)

四音節のすべてが音声を異にし、文字を異にする。これらの型は次のABCB型もそうだが、子音や母音の交替を利用して「ふぞろいな音，多種類の音，わけのわからない音」を描写している。『西遊記』と『金瓶梅』の例をみると、第二音節(li)と第四音節(la)に同じ音がくる。これは「A里BC」型と呼ばれるものである。里は「わたりの音」で軽く発音される(『紅樓夢』『兒女英雄伝』では溜)。第一音節と第三音節の子音はp-p, x-h, b-bと対応する。これらの対応は4音節に繰り返しのリズムを導入し、できるだけ滑らかにつなげるための工夫であろう。この型は元の時代に生まれ、多用された。明代の三書には少ない。

㊻ (孫大聖)將金箍棒幌一幌，變作三根金箍棒，劈哩撲辣的，往東打一路，往西打一路，兩邊不住的亂打。(〔孫大聖は〕金箍棒をさっとひとふり、三本にすると、東に西にと、ガンガン打ちまくっております。西 40・537)

㊼ 我倒不言語，你只顧嘴頭子哩哩礮喇的。(私の方は黙っているのに、あんたはペラペラしゃべってばかりいるわ。金 18・459)

「劈哩礮喇」について李申(1992)は、元曲でも「劈溜撲刺」「必律不刺」などとして使われるとし、「他口里必律不刺說了半日，我不省的一句(かれは半日ペラペラしゃべっていたけれど、私は一言も分からなかった)」「(勘頭巾)劇第二折)などを例にあげる。現代語でも「噹哩拍喇」として次から次へとしゃべる様子に用いられる。この語が長い歴史をもっていることがわかる。

## 2. 8 ABAC 型

水滸伝：脰肢脰察 西遊記：撲哩撲刺，蹠蹠蹠蹠，嗚哩嗚喇 金瓶梅：なし  
 (『紅樓夢』は1種，『兒女英雄伝』なし)

この型は唐代に由来すると考えられる。「更著一雙皮履子，紇梯紇榻出門前」(「紇梯紇榻」はげたの音。唐・崔涯「嘲妓詩」)あたりが、早い例とされる。第二・第四音節が zh-ch, l-l と双声か類似の音の関係にある。

- ① 史進踏入去，調轉朴刀，望下面只顧脰肢脰察的擗。(史進は踏み込むと、朴刀を逆手に取り直し、プスプスと突きまくった。水6・100)
- ② 那裏面蹠蹠蹠蹠的又走出兩三個半老不老的婦人，…。(中からペタペタ靴音させて、また二三人中年の女も出て来ました。西53・709)
- ①は刀で突き刺す音，②は靴を引きずって歩く音で、いずれも多数で乱れた感覚をとまなう。

## 2. 9 ABBC 型

水滸伝：なし 西遊記：なし 金瓶梅：水仙子曲に6種  
 (『紅樓夢』『兒女英雄伝』なし)

これは ABB 型に一音節を添えた変則的な四音節語であるが、第四音節の C は第二・三音節と疊韻の関係にある。元曲に特有な象声詞の型で、特に鄭德輝「倩女離魂」劇・第四折の古水仙子曲にはまとめて使用されている(田中謙二1992参照)。三書からは『金瓶梅』第54回にこの古水仙子曲をそのまま引くだけで、採取できなかった。

- ③ 將水面上鴛鴦忒楞楞騰，生分開交頸。疎刺刺沙鞦韆鞍撒了鎖革呈。厮琅琅湯偷香喝處號提鈴。支楞楞箏絃斷了不尻續碧玉箏。咕叮叮噹精軛上摔破菱花鏡。撲通通鑿井底墜銀瓶(金54・384)

元曲にはほかに「梧桐雨」劇に“疎刺刺刷”，「鴛鴦被」劇に“赤力力尺”などがみえるが、どうやら特定の作家にかかるものらしい。

## 2. 10 ABC 型

水滸伝：なし 西遊記：なし 金瓶梅：咕叮噹  
 (『紅樓夢』『兒女英雄伝』なし)

この型も金元の戯曲で使用されたものだが、明代の三書からはほとんど採取できなかった。『金瓶梅』の例も ABC 型と同様、引かれた「後庭花」という曲中にあるが、これは元曲に頻繁に用いられている。例えば、「梧桐雨」雜劇・第四折に「吉丁當玉馬兒向檐間鬧」とある。金属や玉がうち当たる音(風鈴の音)である。

- ④ [後庭花] 夢了些，虚飄飄枕上胡蝶。聽了些，咕叮噹簷前鐵。([後庭花] 夢見るは、ヒラヒラ、枕に舞う胡蝶。聞こえるは、チリリン、軒端の風鈴。金73・448)

## 3. ま と め

以上、明代の象声詞のそれぞれの型について考察してきた<sup>9)</sup>。最初に述べたように、種類や数としてはA型、AA型、AB型、ABB型、AABB型が圧倒的多数を占めた。清代の『紅樓夢』などと傾向が近い。調査する前までは、同じ白話文学として、前代の元曲などの影響が強く反映しているのではないかと思っていた。例えば3音節や4音節の象声詞にである。もちろん影響はかなりあるが、圧倒的ではなかった。考えてみれば当たり前のことだが、元曲は戯曲なので、見て聞く文芸である。中でも曲（歌詞）に特色がある。その歌詞の中に象声詞は大量に用いられる。元曲に特有の3音節や4音節の象声詞もその歌詞のリズムの中から生まれてきたものである。一方、明の白話長編小説はもとは講談や戯曲などから発展して来たものだが、読み物として知識人により整理がなされている。本来なら歌の部分が文言の詩詞や場面背景描写にかえられている。とすれば、文言からの象声詞、例えばAA型が大量に用いられていることもうなずける。

しかしながら、細かく見ていくと、この論文で考察したように、三書の象声詞には、新しく口語から生まれたもの、作者が工夫したもの、用法など、変化も見受けられる。文言と白話をミックス集大成させながら、文言の部分が減少していき、やがて純粹の口語による小説の誕生となる。そうやって象声詞に又新たな展開がもたらされる。明代のこれらの小説に見える象声詞の状況は、そのための涵養段階であったのではなからうか。

今回はおもに形式面からの粗い考察しかできなかった。さらに象声詞の内容や音声面での特徴の考察、明代における他の言語資料の調査などをおこなう必要がある。今後の課題としたい。

## 註

- 1) 参考までに、前回調査した『紅樓夢』『兒女英雄伝』におけるそれぞれの型における数(種類)を下に( )で示した。また、元曲については、趙金銘(1981)のそれぞれの型の使用頻度調査がある。象声詞の分類の仕方が違うが参考までに下に示す。  
 ABB型 29.1%    AA型 28.3%    AB型 9.1%    四字格 8.3%    AABB型 7%  
 ABBC型 5.4%    AAA型 5%    A型 4.5%    ABC型 3.3%
- 2) 「地」と日本語オノマトペの「と」の比較については、中西正樹 1997. 「日中オノマトペ助詞の比較—“と”と“地”」、『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』、東方書店、375-395頁を参照。
- 3) 小野忍・千田九一 1967. 『金瓶梅』上、平凡社、435-437頁。
- 4) 『金瓶梅』では、ある特定の回にのみ(第53～57回)、「的」「地」にかわって「里」が用いられているところが若干ある。「不覺地撲簌簌里吊下涙來」(金55)、「哈哈里笑道」(金57)。これは現代でも方言に見られる。(李思明・植田均 1992. 「『水滸伝』と『金瓶梅詩話』の言語—状態を示す重畳型—」、『中国語研究』第34号、28頁参照)
- 5) 2)の翻訳によると、「修篁簌簌」は「篠竹(しのだけ)こんもり生い茂る」(中239頁)と訳される。簌簌にはたしかに「茂るさま」(大漢和辞典8、884)という意味もあるが、この当時の簌簌の使われ方を見てみると、『水滸伝』では「山邊竹藤裏、簌簌地響、搶出一條吊桶大小、雪花也似蛇來」(1・5)とあるように、葉や枝が軽く触れ合う音に用いられている。『金瓶梅』の他の例を見ると、「只聽得一聲響、簌簌地將那樹枝帶葉打將來」(1・10)とある。これを前記の訳書は「ばさりと、そのあたりの木の枝が葉といっしょに落ちただけ」(上7頁)と訳すが、これらも第54回の修篁の場合と同様、やはり葉や枝が軽く触れ合う音として、ガサガサとかザワザワとか訳した方が良いようだ。『金瓶梅』には雨が降る形容にも簌簌を用いている(第83回)。拙著『中国語擬音語辞典』(1995、東方書店)を参照。

- 6) 王学奇主編 1994. 『元曲選校注』第四冊上卷, 3813頁.
- 7) 『金瓶梅』第71回には「鑑(水滸伝は鏗) 鑑鉤鉤 籠籠蓼蓼, 刮刮刺刺(水滸伝は刺刺刮刮), 嚶嚶噉噉, 枝枝楂(水滸伝は杈) 楂」の象声詞が見える. この部分は『水滸伝』第82回によったものであるが, 『水滸全伝』本にはないので, 参考までに注記する.
- 8) 現代中国語象声詞のどのAB型がAABB型に展開できるかについては, 拙著『中国語擬音語辞典』(1995, 東方書店)を参照.
- 9) 三書以外にも, 白話短編小説として, 馮夢竜『古今小説』を調査したが, 思っていたより象声詞は少なかった. 三書に共通するものが多いが, 見えないものは「突突(心臓の音), 閉閉(戸をたたく音), 鏗鏘(楽器の音), 瞭瞭嘒嘒(雁の声), 知知茲茲(鼠の声), セ凹セ凹(猫の声)」である.

#### テキスト・参考文献

- 1) 野口宗親 1993. 「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』—」, 『熊本大学教育学部紀要』第42号.
- 2) 田中謙二 1992. 「くことば」の類似現象—感動詞と擬声・擬態語」, 『日中文化研究』第3巻.
- 3) 趙金銘 1981. 「元人雜劇中の象声詞」, 『中国語文』第2期.
- 4) 劉鈞傑 1985. 「元代象声詞的兩種变化」, 『漢語學習』第3期.
- 5) 『水滸全伝』1954. 人民文学出版社.
- 6) 『李卓吾評本西遊記』1994. 上海古籍出版社.
- 7) 『金瓶梅詩話』1963. 大安書店影印本.
- 8) 『古今小説』1958. 人民文学出版社.
- 9) 香坂順一 1987. 『《水滸》語彙の研究』, 光生館, 472頁.
- 10) 耿二嶺 1986. 『漢語擬声詞』, 湖北教育出版社, 110頁.
- 11) 鈴木和子 1988. 「“象声詞”のタイプと音声描写特徴」, 『駒沢大学外国語学部論集』第27号, 132頁.
- 12) 李申 1992. 『金瓶梅方言俗語匯釋』, 北京師範学院出版社, 448頁.
- 13) 許仰民 1985. 「試論古代漢語象声詞」, 『信陽師範学院学報』第3期.